

雲のたね

中嶋 直人

ぼくたちは母さんを車イスにのせて、病院のうら庭を歩いていた。

十二月のさすような北風が、ヒュツと音を立てて耳元をすりぬけていった。

お医者さんは、もつとあたたかい日にと言ったけど、母さんが行きたいと言ってきたきかなかったから。

「病室じゃ、雪の北尾山が見えないんだもの」
ポツンと言った。

そのとき、前に行く弟が大きな声を出した。

「わあ、何これ」

足元を白いわた毛がかたまって、ふわふわところがりながら風にはこばれていた。

弟は追いかけて行つて、両手にわた毛を持つと、

「見て見て、雲のたね」

はしゃいで言った。

「おもしろいことを言つなあ」

父さんが答えた。

母さんは、かけてきた弟からそれを受けとった。

「ほんとね。もし天国に行つたら、この雲のたねにのつて会いに来てね」

ぼくはドキツとした。

「おいおい、変なこと言うなよ。これはガガイモっていうただの草のたねなんだ」

父さんは言ったけど、ぼくはそのときうすうす感じていた。

弟はわた毛をひろい集めてポケットに入れていた。

ふた月たつて、ようやくやわらかい風が吹くころになっても、母さんは入院したままだった。

おみまいに行くと、弟はすぐ母さんのふとんにもぐりこんだ。

「おい、母さんは病気なんだぞ」

ぼくが言うと、弟は「ふん」と母さんのむねに顔をうずめた。

「おい！」

強く言ったとき、母さんの細い声がきこえた。

「いいよ。よかつたら、お前もおいで」

母さんはあいているうでを広げた。そでの下からやせ細った母さんのうでが見える。

「いい」

ぼくは目をそらした。

「ごめんね。ランドセル、えらんであげたかったな」

母さんは弟の頭をなでた。

「たかしの学生服も」

やさしい目をして、ぼくを見た。

「うん」と答えるのがせいっぱいだった。

三月、やけにあたたかい南風が吹いた日、母さんは死んだ。

新学期がきて、ぼくは中学生になった。

やりたかった部活には入らなかった。弟がいるから。放課後、児童館にむかえに行つて家に帰る毎日だった。

そのうち、弟が庭のすみでうずくまっていることが多いのに気がついた。

そんなある日、勉強していたぼくの所に弟がとんできた。

「兄ちゃん兄ちゃん、大変。来て」

ぼくのうでをつかんで引っぱった。

「何だよ、勉強中だぞ」

いつもそつだ。相手のことなんてちっとも考えない。自分勝手なんだから……。

弟は庭のすみにつれていった。

「あ……」

そこにはつんつんとがった一センチぐらいの芽が、ぞくぞくと出ていた。

「雲のたね」

え？……あれ持つてきて、まいたのか。

「これぐらいあればのれるよね」

弟の声ははずんでいる。

“キント雲じゃあるまいし”

出かかった言葉をのみこんで、ぼくは部屋にもどった。

それからも弟は細長い葉っぱが開いたと言つてはぼくをよび、つるがからんだと言つてはぼくの手をとった。

小さな花が咲いたと言つては手をたたき、ミツバチが来ていると言つては、口びるに人さし指

を当てながら、しのび足でぼくを引っぱり出した。

あんまりうれしそうで、ぼくはほんとうのことを言えなかった。暑い夏がすぎ、さわやかなすず風がほほをなでるところになった。

弟は目をまん丸にして、ぼくの所に来た。

「兄ちゃん、たね。たねがついてる」

ぼくは急ぎ足で弟のあとについて行った。

からみついたコスモスの葉かげに、おや指くらいの、ごっごつしてとんがった実がついていた。

「兄ちゃん、いつごろ雲のたねになるかな」

ぼくは言葉をなくした。

そんなぼくに弟はさいそくした。

「ねえ兄ちゃん。兄ちゃん」

追いたてられて、ぼくははじかれたように言った。

「あのな、これは草のたねなんだ！ 父さん言ってただろ。」

いくらこれを集めたって、お母さんの所に行けるわけじゃない。お母さんにはもう会えない。

死んじゃ……」

はっとした。

ほんとうはぼくに言ってる。自分に言いきかせてる。

びっくりして何も言えなくなったぼくに、弟はもうぜんと言い返してきた。

「わかってるよ兄ちゃん！ ……ぼくだってわかってる」

なみだをいっばいにためた目で、ぼくをじっと見つめた。

“そうか、わかってたのか……”

思わずぼくは弟をぎゅっつとだきよせた。

ぼくのむねに顔をうずめた弟。ふるえが伝わってくる。

“ぼくだっっておまえと同じだ”

そう思ったとき、何ともいえないぬくもりも伝わってきた。

なみだがこぼれそうになって空を見上げたぼくの目に、のん気な風に流されている、ひとかけらのまっ白な雲が映った。

(おわり)